

連もないからよいものの、これに比較できない大きなマイナスであった。葬儀、初七日、四十九日、納骨ころまでは忙しさに紛れていたが、最近になって遺品を整理したり、聞きたいことが出て来たりすると、この生死の境が何とも無限に遠いこと、如何とも連絡の仕様が絶対ないこと、をつくづくいやという程思い知らされて、目頭の熱くなっている自分に気付くことが時々ある。そして「幽冥境を異にする」とか「あの世に待つ」とかの語がいかにも空虚なものかと腹立たしくさえなる。さらに想いを馳せるなら、まごまごしていれば人生とは何と早く、はかないものかとも反省させられる。しかし今の私はここでむらむらと「充実した人生を、今からでも送ろう」と決心する。こうして当り年のマイナス部分を母とともに善用して行きたいと願ってやまない毎日である。

## 文教育学部新棟の建設のこと

浅 海 重 夫

文教育学部の新校舎の建築が、昭和45・46年度の継続工事により、47年2月完成の予定で着工された。この新棟の設計原案を練る建築委員会が学部組織されたのは、4年前の42年2月であった。各学科1名ずつの委員の中で、地理学科代表であった私は、数字に弱くない(はずの)唯一の委員ということで、各科配分面積の算出や建物設計試案の提示などをまかされたために、44年頃から委員長にされ、工事終了までの委員会責任者となってしまった。これは私にとって甚だ不似合なことに思われた。第一、地理を専攻しているからといって、誰もが数字に強いとは限らない。また委員長ともなれば、利益代表として集まった各科委員の主張を、うまくさばいていかなければならない。さらに予算をよこす文部省側との折衝があって、これは一そう面倒な仕事である。しかしその折衝も昨年(45年)秋までに終り、工事の着工をみたいま、これらの難問をどうにかきりぬけたことについて、われながら不思議

元来数字を扱うことや建物の設計図をいじくることは決して億劫ではない。弱くないというより嫌いではない。この点は私にとって幸いであった。次に学部内の配分に関して公正と協調の精神を買いたこと。委員長として最大の、あるいは唯一の配慮はこの点にあったといってもよい。私が委員長であったために損をしたと思われかねないのは地理学科である。文部省との設計図の協議過程で、事実そのような場面が何度もあった。古来領地争いというものには深刻だといわれる。将来への禍根を残さないために、学科間のバランスについて最善の努力をしたつもりであって、地理が特別

の利益を得たことはないといきれることに満足している。

新棟の着工までの経過について簡単に紹介しておく。この文教育学部建築の基案は昭和38年に全学施設計画委員会（常時設置）が将来計画案の1つに入れたものである。文部省基準によると女高師時代の建物の広さでは新制大学の必要面積にはるかに及ばないのであるが、理学部は数年前の新築でほぼ基準を満たし、家政学部は大学院増築分（既設）と現在の本館の大部分を使用することによって基準に達し、一般教育関係も2年前に完成した新棟と近く建築予定の大講義棟に、本館の一部のへやを加えて基準面積を消化する。このように本館を家政学部と一般教育にあてることに決った段階で、全く新たに別棟で文教育学部を建てることになったわけである。文部省の基準内だから予算をとること自体は問題はないのであるが、以上の大学全体計画が固まるまでに年月を要したのと、文教育学部新棟の建設予定地（南門の前）に厚生省用地がくいこんでいて厚生省官舎が建っていたため、その代替地との交換折衝に手間どったのが、予算のおりる時期の遅れた原因である。

文教育学部の建物の広さは、学科数と講座数をもとにした文部省基準でまず全面積がきまる。その限度内で部屋わりなどを考えるに当り、使用するわれわれの希望と建築上の制約のほか文部省側（管理局教育施設部工営課）の意向が加えられて、計画は何度か練り直された。建築委員会としては、(1)対文部省、(2)対大学全体計画、(3)学部内学科間の調整、(4)对学生自治会、に配慮が必要であり、また各委員はそれぞれ学科内の調整者としての使命も負った。

文部省側の意向には大学側の予想に反することが多かった。建築委員会の試案は学科の面積配分を文部省の基準にあるとおりの計算<sup>算</sup>で行い、またそれ以外によい方法はないと判断しているのに対し、文部省は基準はあくまでも目安であって、必要性や利用度の観点から部屋わりをすべきだといひ、学科毎に小さくまとまり、教官個室を細かく配置する大学側の案はあまりにもセクト主義だと評する。学生控室の要求をひかえ目にもりこんだ建築委員会試案は、教師と学生の対話の場を作れという文部省側の姿勢よりむしろ後退的とさえみられた。建物全体のデザインについては文部省工営課の専門家たちにまかせた形で、8階建、コアシステム（建物の横断面が正方形に近く、中心に階段エレベーター等をおき、その周りに廊下がひと廻りし、外周に部屋を配する）、2階のフロアだけ1つの側方に突出したアシンメトリーの設計である。学生数に応じて最高階に体育、7階に地理、6階以下に4講座をもつ史学、哲学および語学関係と配置したのは、主として安全基準によるものだという。概括すれば、セクト主義といわれながら学科配分に公正を期した委員会の希望はほぼ全面的にたおり、学生関係の設備は全体のデザインと共に文部省の意向をとり入れた案に落つたと云える。

✻ 地理学科の場合を例示すると、

150 m<sup>2</sup> (1 講座についての面積) × 3 + 100 m<sup>2</sup> (実験講座であるための加算面積) × 3 + 150 m<sup>2</sup> (文部省基準による1学科についての面積) × 5 (学部内の学科数) ×  $\frac{3}{32}$  (文部省設置基準5学科に対し、学部内では實際上9学科の扱いをしているので、学科配分の面積を学部内全講座数に按分して各科の割当に加えたもの) = 820 m<sup>2</sup>。これから共通部分(廊下、トイレ等の分)として一率に3割(246 m<sup>2</sup>)引き、さらに共通講義室(全学部で講義室を6室設け、3階のフロアに集めた)分への供出として100 m<sup>2</sup>をひいて、474 m<sup>2</sup>が地理学科の部屋として使える割当。最終決定によると、教官研究室4、実験室3、計測室1、製図室1、図書室1、準備助手室1、演習室1、家生控室1を設け、計450 m<sup>2</sup>(実験講座からなる地理は、教育・体育に次いで総面積が大きい方なので、修正のさいに基準より24 m<sup>2</sup>減となった)ちなみに現在の地理学科は、学部内でも広い領地をもっているといわれるが、講義室を除くと390 m<sup>2</sup>である。(最近加えた2階の標本室とも)。

紙面の割当をすでに超過しているので詳細に記すことができないのは残念である。今年秋頃には南門の前に8階建の鉄骨が組上がると思うが、現物をごらんに入れる段階で、また説明をする機会をもちたい。

いま完工後について心配をしていることは、各部屋の配置は果して適切であったか、南面の部屋は騒音と風塵になやまされるのではないか、机や書棚は当分現在のものでも間に合うことになりはしないか、学生控室の適切な利用がなされるだろうか、非常の場合の対策は万全か、等々である。とかく物事は上首尾にいてもともとで、失敗があれば責任を負わされることになっている。いまもひびいてくるくい打ちの音を聞きながら、部厚い現場の設計図を前にして、予想外のミスをふくんでいるかもしれない新校舎の完成像を頭に描く。

## マイソールのエキスカージョン

式 正 英

もう2年も前のことになるが、南インドの旅の一駒を紹介することにしよう。マイソールはマイソール州の旧都で藩王の荘麗な宮殿があり、マイソール大学もある。「デカン半島の地形発達史」と「計量地理学」の2つのシンポジウムがこの大学の地理学教室で開催された。ゆるやかな起伏に